

村島大兄

以上、小稿では村島婦之関係書簡の一部である九篇を紹介した。書簡類は、この他、当時のジャーナリズムの中枢にいた人物のものも含まれ、第七代毎日社社長高石真五郎、神田五

## 【新刊紹介】

飯島 吉晴著

### 『笑いと異装』

(一九八五年二月刊 海鳴社モナドブックス 五〇〇円)

笑いや涕泣という身体に深く関わる行為は、特に人類学の分野では多く取り上げられてきた問題である。本書は、この問題について日本の民族儀礼や昔話を中心に考察を進めようとするものである。本書の内容は、著者の既出論文を書き改めたもので、次のように四章に編集されている。

第一章 笑いのフォークロア

第二章 涕泣のフォークロア

第三章 民俗における儀礼的な笑い

第四章 異装のフォークロア

昔話における笑いは、絵姿女房譚に見られるように、主人公の百姓が女房の笑いを契機として殿様になる等の秩序の逆転や転換とい

雄等、見るべきものも多い。それらについては、後日、稿を改め発表したいと考えている。

(関西大学大学院生)

う象徴的機能を果たしている。マタギの成年式・沖繩県の「胞衣笑い」などの通過儀礼にも哄笑が伴う。柳田國男が『山の神とラコゼ』で紹介したように、霜月の山の神祭などの季節的祭祀でもオコゼに対する儀礼的な笑いが行われる。これらの笑いは時間的・空間的境界において異界とこの世を媒介する重要な要素であり、場の転換や季節の交替を指し示すものである。又、悪態祭の異名のある三河の花祭にみられるような悪口や、正月に関東一円で行われるドタバタの行事に伴う儀礼的涕泣、そして成年式などになされる女装や仮装も同様の機能を有するものであるという。

「来年のことを言うと鬼が笑う」というのは日常よく耳にする言葉である。落語の「野崎詣り」は、参詣の途中で悪口を言い合って勝つと一年間の運がよいという俗信がモチーフになっている。このような身近に登場する笑いや悪口も、視点を変えて見ればおもしろいものになるかもしれない。近年、パフォーマンスなど人間の動きが注目されてきているが、さらに身体の内から発現してくる笑いや涕泣の意味を考え直そうとするならば、手始めに本書を一読されてみるのもよいのではないだろうか。

(澤井 浩一)